島根大学法文学部紀要　文学科編　第14号―Ⅰ（1990.12）

『周防産物名寄』の方言語彙

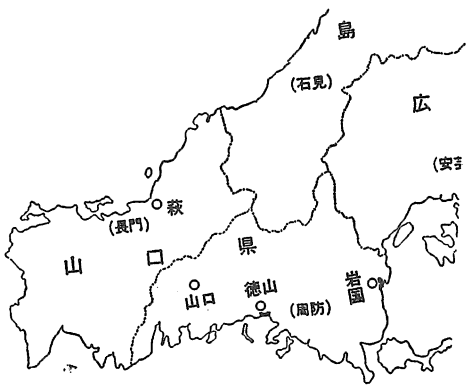
十八世紀の周防方言と『中国五県言語地図』

田籠博

小稿は享保元文年間に幕府の要請によって作成された産物帳とその関係資料について、それを近世中期の方言語彙資料として利用することを旧周防国すなわち山口県東南部に例をとって試みるものである。使用する主な資料は次のものである。

① 周防産物名寄（『長防産物名寄』のうち）
② 周防岩国吉川左京領内産物幷方言
③ 玖珂郡熊毛郡産物名寄帳
④ 周防国都濃郡徳山領産物附立

各文献の概略を記しておく。①「周防名寄」を含む『長防産物名寄』には鳥田智庵の元文二年（一七三七）六月の自序があり、国会図書館蔵の一本は同三年八月の写本である。内容は前半が「長門産物名寄」で、本稿で使用するのは後半の「周防産物名寄」の部分である。実質的には「周防国産物帳」であるが、元文五年頃に幕府へ提出された完成本ではない。元文



図A

二年十月にいったん作成し、内見として江戸へ送られた中間報告とほぼ同じ内容のものである。序文の日付からみると、中間報告作成のために用意されたものに、烏田智庵が注記などを加えたものらしい。完成本が伝わらない以上、周防国産物帳の全貌をうかがう事ができる唯一の資料となっている。②「岩国産物」は萩藩の命で元文元年四月に支藩の岩国藩から提出された産物調書で、その原本かと思われる。資料名に「方言」とするのは、産物名の見出しの下に「〜ヒ」の形で注記された異名を意味する。周防名寄編集の主な材料はこれから得られた。③「玖珂熊毛産物」は岩国藩の西に隣接する玖珂郡と熊毛郡から出された産物調書である。現存の写本は元文四年三月の識語を有するから①に遅れる事になるが、同内容の報告が元文二年以前に送られていたと識語から推定して使用する事にする。④「徳山産物」は徳山藩から提出された時期、事情とも不明であるが、前記資料と密接な関連があると認められるから、ここに用いる。

引用本文は、①は国会図書館蔵元文三年写本により、②以下は『享保元文諸国産物帳集成』第Ⅸ巻（科学書院）所収のものを用いる。同『集成』第Ⅷ巻には、周防国と長門国の絵図註書および関係文書資料が収められていて、Ⅸ巻所収の他資料と共に参考にすべき点が多い。なお、資料①が②〜④に多くを負う事は日野巌氏の『防長本草学及生物学史』に述べられ、筆者にも詳しく検討を加えた別稿がある。(注1)

さて、産物資料を方言語彙資料として利用する場合、いくつかの難点が存在する。まず、文献資料の常として、仮名表記であると漢字表記であるとを問わず、文字で記載されている産物名が実際には何に該当するのかを厳密には決定しがたいことである。この問題については、かつて『出雲国産物名疏』を例として述べた事がある。(注2) 例えば、島根県内の樹木名を調査された沖村義人氏によると、出雲地方でヒノキ科ヒノキとサワラを指す名称が標準名と入れ違っているという。(注3) ヒノキを呼ぶのにサワラと言い、サワラをヒノキと呼ぶのである。しかも、同科のヒバを含めて、アサカベという。地方名が各々に存し、全体としての統一がない。従って、木類に載っている「檜・サワラ」を記事のままに理解してよいのか迷うし、「アサカベ」に至ってはどの種とも決めかねるのである。

また、産物帳そのものが現在の図鑑類のように厳密な分類と整理の結果でない事に起因する難点がある。再び出雲

の樹木に例をとると、産物名疏には「馬酔木、マメイリシバ」の2種を載せるが、この場合は別種と解するのは適当でない。ある郡のマメイリシバの絵図註書にアセブに似ていると記しており、絵図を見ればやはり現在の馬酔木（アセビ）に類似している。同種の樹木をアセボとする別の郡もあって、同じ樹木が地域により異なった呼称のまま報告され、産物帳編集段階でも十分に整理されずに採択された可能性があるからである。異名同種の産物が存在する可能性を無視できないのである。

問題をいっそう難しくするのは、異なった見出しであれば異なった産物に該当するという前の例と、見出しを異にしていても実際には同じ産物に該当するという後の例とが、矛盾を含むことである。これを避けようとすれば、結局は一つひとつの記事を慎重に再整理するという迂遠な方法をとらざるを得ない。その他にも、漢名の訓みの問題、仮名表記であっても濁点をどう施すかなど、精確な分類と語形を得ようとすれば困難が多い。

周防名寄のように編集材料を提供した資料が存在し、後に再編集された周防国産物帳が一部推定できる場合にも、別種の問題が存在する。左に岩国産物帳と周防名寄、および他資料から推定した完成本「周防国産物帳」の記事を対照して示す。周防名寄の記載形式は他にならって変更した。(注4)

〔岩国産物〕
蜻蜓（トンボウ）
其種
コンヤトンホウ
シマトンホウ
シヤウレウトンホウ
赤トンホウ氏
ヤンマ
其種
シマヤンマ
青ヤンマ

〔周防産物名寄〕
蜻蜓（ヤンマ）
アヲヤンマ氏
其雌ヲ
油メン
シマヤンマ氏
白蜻蜓（シホヤキ）
白トンホウ
ハイトリトンホウ氏
其雌ヲ
モンギト云

〔周防国産物帳〕
蜻蜓（トンボウ）
ヤンマ氏
其雌ヲ
油メン
シマヤンマ氏
アヲヤンマ
白蜻蜓（シホヤキ）
白トンホウ
ハイトリトンホウ氏
其雌ヲ

深山ヤンマ　　シマトンホウ氏　　モンキ
クダマキ　甚太〔也〕　　鬼蜻蜓（ヲニヤンマ）　　シマトンホウ氏
＊　　ヲニトンホウ氏　　シヤウリヤウトンホウ
右岩国より御付出如是候、　　ミ山トンホウ　　アカトンホウ氏
江戸初手御付出ハ題書え　　クダマキ氏　　コウヤトンホウ
ヤンマとカナ付有又候得　　赤卒（アカトンホウ）　　コンヤトンホウ
共、此度者トンホウと　　ヤクシトンホウ氏　　クロトンホウ
仮名付相成候、トンホウ　　シヤウレウトンボウ　　カネツケ氏
之方言ニ有之候、青ヤンマ　　アカトンホウ氏　　鬼蜻蜓（ヲニヤンマ）
此度ハ一ツ書ニ相成候、　　コウヤトンホウ　　ヲニトンホウ
題書之ヤンマノカナ　　コンヤ〜　　深山トンホウ
此度方言ニ相成候、御付出（注5）　　カネツケ氏　　クタマキ氏
左之通、入ましりも有之候事　　クロトンホウ　　甚太也

右上に挿入したのは、岩国産物と周防国産物帳の相違点をまとめた記事である。整理して示すと、

ヤンマ　　ヤンマ類の総称　　↓　一種名　　↓　トンボウの異名
トンボウ　　非ヤンマ類の総称　　↓　　×　　↓　ヤンマの異名を持つ一種名
青ヤンマ　　ヤンマの一種名　　↓　ヤンマの異名　　↓　独立した一種名
シマヤンマ　ヤンマの一種名　　↓　ヤンマの雌の異名　　↓　トンボウの雌の異名

となり、細部の手直しという程度ではない。各資料の編集は相当の知識がある者が担当したはずだが、その結果が右の大幅な記述の変更であるから、（注6）どの段階の資料を信頼して現在のトンボ類に比定すべきか決めかねるのである。編集過程が分かっているために却って困難が増すことがある。

ともあれ、産物資料に内在する利用上の難点は、時間を費やしても完全な解決が期待できそうにない。当面は、問題ごとに対処するという便宜的な方法によらざるを得ないだろう。本稿で用いる例もそうした中で得たものである。

方言語彙資料としての有効性を明らかにするために、次のような検討の方向を考えてみた。

第一には、分類や意味などの微妙な問題に捉われず、とにかく当該地域の現代の語彙と比較して一致する記事の存在を指摘する事である。そもそも文献に記載される事が稀な方言語彙を、二世紀以前に地元で作成された資料で確認する事ができれば、それだけでも大きな意味がある。しかし、産物資料独自の有効性を示すためには、現代の事実の遡及的確認にとどまらない当該地域方言の歴史に新たな展望をもたらす事が望ましい。今は存在しない、いわば失われた方言語彙の分布を反映している可能性があるのではないか。分類の曖昧さが払拭できず、整理が徹底しているかどうかに疑問が残るものの、網羅的記載を原則とする産物資料には偶然の例や不注意による記載漏れの可能性が一般の文献よりも少ないはずである。京都や江戸から見て珍しい語だけを集めた方言集ではないから、ある程度体系的な検討にも適するだろう。(注7) こうした第二の方向へ進むためには、別に適切な方法を講じる必要がある。

本稿では、広戸惇氏の『中国五県言語地図』を対照資料として使用し、その周防地域から書き抜いた語形を産物資料の記事と比較する方法をとることにする。収録語数が豊富な方言辞典類ではなく言語地図を用いた理由は、主に第二の方向で検討したいためである。つまり、二世紀余を隔たる比較であるから、周防地域の方言分布状況がその間に変化している事が当然予想される。もしそうであれば、地域単位の辞典類との比較では既に周辺地域へ分布が移ってしまった語の行方を知る事はできない。『日本方言大辞典』の刊行で事情は変わってくるだろうが、周辺地域の状況を容易に一覧できる言語地図との比較が現段階では適当だと考えた。

作業の実際は、『中国五県言語地図』の中から岩国市周辺（県別地点番号47・51・52・53）、北部を除く玖珂郡・熊毛郡（同42・48～50）、徳山市周辺（同37・40・41・43・44）の各地点に現れている語形を集め、それらを産物資料の岩国産物、玖珂熊毛産物、徳山産物が記載する所と比較する。産物資料の記載単位を項目と呼ぶ。これは見出しに限らず、小分類された種名、注記された異名や成長名などすべてを同じ資格で扱う。その間に絶対的な区別がないことは、前掲トンボの例から分かる通りである。また、未整理の項目がある可能性を考慮して、別見出しとして掲げられている項目を一括する事がある。地元資料が残る三地域以外の、特に周防西部の比較ができないが、周防名寄にそ

の分を補う所がある。

このような方針で作成したのが付表の№1～6である。ただし、対照資料の作成が前記事情で難しかった31図「青い大型とんぼ（ヤンマ）」などは含まれていない。また、1図「せぐろせきれい」と2図「きせきれい」は産物資料で区別が不明確であるから便宜的に一括した。なお、産物資料の欄に示した項目は、比較し易くするために筆者が推定した読みである。清濁など訂正を要する場合があるかも知れない。同欄の＊印で始まる項目は異名として載っているもので、他は見出し項目か一種名ということになる。産物資料の側に種々の問題が残っているが、詳述はすべて割愛する。

最初に対照表を概観しておこう。対照すべき語形と項目の間で、数が対応していない事も一因となって、両者がほぼ完全に一致する場合もあれば、まったく一致しないものもある。言語地図と産物資料が一致するのは少なくとも36、44、67、85、91の各図、一致が見られないのは8、9、33、51、53、54、55、59、75、82、86、88、101、104の各図である。残る大部分は、語形や項目のどちらかに余分な語形や項目が加わっていたり、語形が多少変化しているために一致しない場合や、80図「曼珠沙華」のように多彩な語形と項目を持ちながらイットキバナが共通するだけという場合もあり、基準の取り方次第で一致するともしないとも判定できるものである。一つでも共通する点があれば一致と判定するなら、全六十九図のうち五十図以上がそれに該当する。詳しく説明する余裕がないから象徴的な一例を挙げておくと、全国的に見ても周防地域の特有語形である36図「蟷螂」のカマツクリが、産物資料にまさしく記載されている事実を指摘しておく。もし一致の程度が高いと認められるなら、言語地図に現れた事実の遡及的確認という本稿の目的の一半は果たすことができた訳である。(注8) 残された課題は失われた過去の方言分布状況を示すような事実が見出せるかどうかである。

地図の語形と産物資料の項目の間の不一致ないしズレは少なくないが、筆者が期待する事実はその裏に潜んでいるはずである。しかし、そのすべてが過去の方言分布状況を示すというには、まだ解決しておかなければならない問題

がある。例えば、9図「燕」や10図「梟」、51図「蝶」などは、両者がほとんど一致していないけれども、だからといって産物資料が過去の状態を示していると簡単にはいえないからである。

9図「燕」では、周防全域でツバクロ類ツバクラ類が分布しているが、産物資料はツバメとツチツバメを載せるだけである。10図「梟」でフクローより勢力があるフルツクがやはりない。産物資料を重視する立場に徹すれば、かつての周防はツバメ類やフクロウの分布領域であり、後に地図に現れているような分布へ変化したということができよう。しかし、中国地方に限らず全国的な分布を考慮すると、容易に成り立つ説とは思われない。

地図に見えないツバメも実は調査で得られなかった訳ではない。広戸氏の解説によると、全地域ツバメともいうが新しい言い方として省略された由である。また、フクローについて解説は次のように説明している。

中国地方のフクロウは、東部を除くすべての地点で、新しく教科書で習ったという。中国地方の大勢はツク系であると考えて誤りはないようである。

この考え方にならえば、産物資料のツバメとフクロウは当時の一般名称を記載したのではなく、文献資料にありがちな文書語もしくは古語などを載せたと解釈すべきだろうか。しかし、筆者の考える所は少し異なる。ツバメやフクロウはやはり当時周防において使用されていた語だと思う。それは51図「蝶」において、産物資料がチョウだけを載せていることと同じ事情だと見なす。口頭ではチョーチョといいながら、文字に写すときにはくだけた語形を避けてチョウと書く心理、すなわち方言のうちに存在する規範形を採用する傾向と解釈するのである。この場合の規範形とは、歴史主義的なそれではなく、方言の中で重層をなす語彙の中のより上位の語形という意味である（82図「山葡萄」で産物資料がエビカズラを載せるのも同じ理由か）。そう考えなければ、他の多くの項目で地図の語形と一致している事実を統一的に説明する事が難しくなるだろう。

50図「蟻」で産物資料がアリを見出しにしているのも右に近いが、これには別の問題が関わってくる。地図のアリコに対して産物資料はアリとし、疑問符をつけて示しているように、岩国産物と周防名寄では別の見出しにアリコ、アリゴを掲げている。相当離れた箇所にあるからアリとは別の種かと思うと、江戸へ出した中間報告に対する指示を

書き留めた覚書[注9]に「アリコ　アマコ氏　江戸ニハアリト云」とあり、アリの一種のようでもある。所が、ハアリが「羽アリ」の意味とすれば、両資料には既にアリの一種の中に載っているのである。また、『日本方言大辞典』によると岡山県、鳥取県、島根県などでアブラムシ（アリマキ）をアマコというらしく、アリと無関係でもなさそうでいよいよ分からない。仮にアリの異名とするにしても、岩国産物のアリコと周防名寄のアリゴの両語形があり、どちらに従うべきか迷うのである。完成本産物帳では清音形アリコを採用した事が次の書き抜きから分かる。[注10]

一　アリコ　アマコ氏

右従岩国御付出如此候、江戸御付出初手はコノ字えニコレ有之候得共、

此度御付出左之通ニコレ無之御付出相成候

一　アリコ　アマコ氏

つまり、岩国から濁点（ニゴレ）をつけずに報告したものを、中間報告では濁音形にしてしまい、再び清音形へ戻した経過が書き留められている。周防名寄のアリゴは一度は公式な語形とされた訳で、写本の誤りではない。[注11]清濁の決定にこだわっていることから推測すると、今日見られる長門アリゴと周防アリコの対立が、産物資料の当時にまで遡る可能性がある。萩に住む編集担当者が自己の語形から類推して濁点の不足と解して添えたらしいからである。いずれにしても、アリ類の総称の位置に載っているアリは、前と同じ問題を生じさせるだろう。

語形の清濁に関しては、61図「蜥蜴」にも触れておく必要がある。対照表の地図の欄にはトカケだけを挙げているが、周防東部にはトカキリがあり、1地点だがトカギリも見えている。岩国から徳山まで三資料が濁点なしであるのに、周防名寄はトカゲと濁音形をとっている。前のアリゴは写本の誤りではなかったが、この場合に限り、濁音形はありそうにない語形である。地図を見ても、周防、長門ともに大部分がトカケであるから、前のような理由付けは成り立たないからである。先に引いた書き抜きには、「トカケ　トカギリ氏」と完成本の記事を記しており、中間報告がトカゲである旨の記事がない。かれこれ総合すると、周防名寄のトカゲは本来の語形を伝えたものとは考えられないのである。[注11]細かい事をいえば、周防に一地点あるトカギリと完成本のトカギリの関係が気になるし、地図で萩周

辺にトカゲが見える事を周防名寄のトカゲと関連させるかどうかも問題ではある。

動物名を例にして、言語地図と産物資料との間で相違する場合の問題点を述べた。地図を重視する立場からいえば、これらは産物資料の資料的価値に疑いをさし挟む欠陥となるかも知れない。それを回避しようとする筆者の判断が妥当かどうかは今後の検討を期すとして、地図と食い違う項目を産物資料が載せていても、直ちにそれが過去の方言実態を反映しているとはいえない場合があることは戒めておかなければならない。

さて最後に、産物資料の記事が有効性を示す例を挙げ、本稿の主論としたい。掲げた地図は『中国五県言語地図』の関係地域を縮小したもので、凡例を省略した代わりに、本文中に必要な語形の記号を示している。詳細は元の地図について見られたい。

① **3図「かわせみ」**〈図B〉地図によると、周防、長門全域にショニ △ が分布する一方、長門南部の瀬戸内沿岸地域および周防の西端にも1地点だがスドリ ◐ が見えている。これに重なるようにカワセミ ● も分布しており、周防では徳山付近までがその範囲である。

産物資料では、徳山を除く三資料にショニ、スドリ、カワセミの三語すべてが載っている。特にスドリは地図で周防西端の1地点に対して東端の岩国にもあるわけで、過去には分布が現在よりも広い時期があった事を示している。カワセミについても、地図では広島県の沿岸部にカワセミ、カワゼミが見えるから、古くは周防と連続していた可能性がある。ただ、スドリとカワセミが同じような分布を示す事になり、二語の使い分けがどうであったのかは分からない。長門名寄では「魚狗（ショニ）　ストリ共」と載っている。

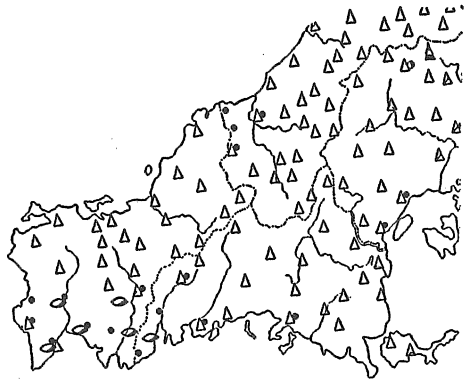
② **12図「きつつき」**〈地図なし〉地図では周防全域にキツツキが分布し、ケラが玖珂郡と佐波郡の山間部に1地点ずつ見え、玖珂郡の同地点にはホンゲラもある。

産物資料が見出しに掲げるテラツツキ系の分布は、中国地方では遙かに東の山間部を中心として分布しているからかつて周防にもあったものなのかどうか判断が難しい。伝統的な語形を掲げた可能性も排除できない。しかし、周防

名寄も「啄木（テラツツキ）　木ツ、キ共」としているから、ひとまず産物資料の記載を信頼して、分布領域が変わったと解しておく。

③ **42図「土蜂」**〈図C〉地図が「土中に巣を作る小さい蜂」という設定で作成されたため、ジガバチとツチバチなど数種が混乱していて分布を読みとることは難しい。

周防全域に分布するドロバチ●は、周防名寄の「ツチハチ　穴ハチ　アゼナブリ　アセスイ　ﾓ」に当たる。ツチバチ○も3地点地図に見えているが、まとまって分布するのは隣接する島根県の石見地方である。周防ではツチ→ドロの置換が生じたものか。アナバチ▮は周防では最北部に1地点のほか石見や広島に数地点見えるが、分布の中心は遠く島根県の出雲や鳥取県西部の伯耆、岡山県であり、どういう関係にあるかは難しい。なお岩国に近い広島県の一地点にアセクラ▼という語が見える。異名のどちらかと関係があるのかも知れない。別種のジガバチ△は周防に4地点見えており、周防名寄に「ジガハチ　コシボソﾓ」とあるのと一致する。異名のコシボソはこの蜂の特徴をよく捉えた命名だと思うが、隠岐島にコシビソが1地点あるだけである。岩国産物に蜂の一種として載るタブミ☆は、周防名寄でも見出しに採られている。右の二種とは別種かと思われるが、地図で広島県西部や石見にタブミ、タボミ類が見えるから対照表に加えた。これは周防では既に失われた語である。



図B

図C

種の混乱はさておき、ツチバチやタブミの例は、本稿でいう過去の分布を産物資料が明らかにする好例ではないだろうか。これらはかつての周防で地図が示す以上に優勢な分布をもっていたと考えられる。

④ 52図「だに」〈図D〉この地図も単一種の地図とはいえないから、多少問題がある。解説で触れているように、形態や生息環境などによる使い分けがある虫類が、一括して図に表されている。山口県について解説は次のように述べている。

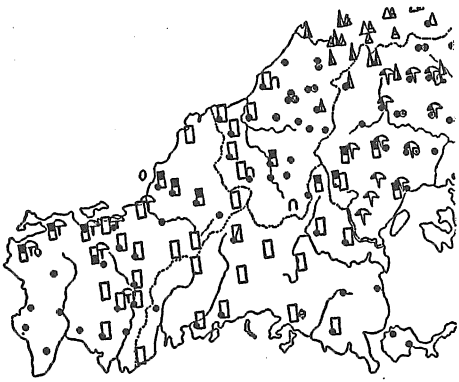
山口県のフツミは丸く大きいのをいうことが多い。ヤエは一般には、普通の小さいもの。しかしところによって多少異る。

産物帳の作成過程でも、牛など家畜に寄生する種を区別するかどうか判断に迷う所があったようで、岩国産物と周防名寄および完成本の間で次のような分類の変更がある。

〔岩国産物〕
壁蝨（ヤエ）
牛蝨（フツビ）
他邦ニタニト云

〔周防名寄〕
壁虱（フツミ）
フツビ共
其小ナルヲ
ヤエト云

〔周防国産物帳〕
壁蝨（フツミ）
タニ共
其小ナルヲ
ヤエト云
牛蝨（フツビ）



図D

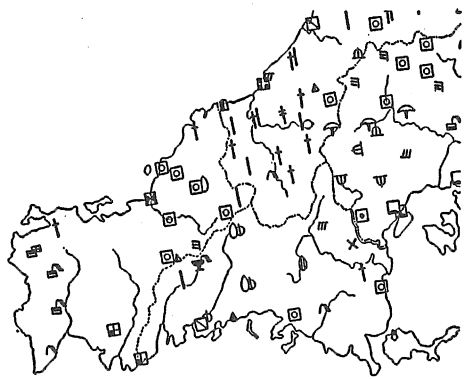
岩国産物がヤエとフツビ（ミ）を区別するのに対して、周防名寄はたんに形態的な大小だけを基準に分け、周防国産物帳は両者を折衷した形で整理している。岩国産物の注記にある他国のダニを完成本が異名として取り込んでいるのは、前述の規範語形の問題と関連する。

地図を見ると、周防はヤエ□とダニ●の分布でほとんど占められている。産物資料が載せるフツビ、フツミは周防では完全に消えていて、長

門の日本海側にあるフツミ 、および広島県西部に広く分布するフツビ がこれと関係すると思われる。分類上の問題を残すものの、この場合もまた失われた分布が産物資料に現われている例とする事ができる。

⑤ 54図「あめんぼ」〈図E〉地図では周防に限っても種々の語形が入り乱れていて、まとまった分布といえるほどのものはない。これにもまた水棲昆虫数種の名称が混じているようである。

産物資料の項目と較べると、アメ は広島県の沿岸部に3地点見え、アメンドー は周防に1地点ある。どちらもアメンボー と関係がある語形であろう。アメンドーは防府市と島根県浜田市の2地点があるだけだが、岩国産物に記載されている所から、古くはより広い使用域があったと思われる。シオウリ、シオカラといったシオ〜系の語は、中国地方では鳥取県を中心として分布しているが、これも過去には周防でも使用されていたことが分かる。別種（ミズカマキリ？）の可能性があるエブリサシもまた周防には失われた語である。地図では隣接する広島県西部にエブリサシ 、エブリツキ 、エブリツク が見えている。



図E

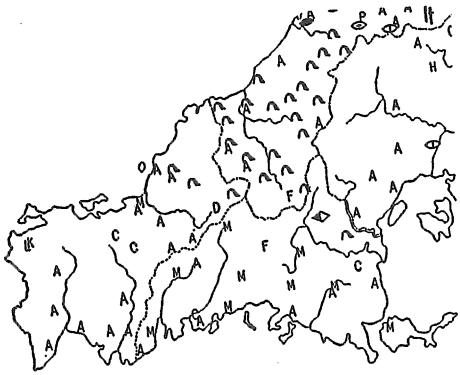
岩国産物にはカワクモ が載っているが、これに対応するように地図の玖珂郡錦町にも見えている。他には島根県益田市と岡山県久米郡久米町に1地点ずつある。一般に、このように隔絶した数地点に稀な語が点在する場合、民衆語源による偶然の一致と考えることが多い。島根県や広島県にウキグモ やミズクモ が点在することも、その解釈を支持する材料となるだろう。それを否定する訳ではないが、少なくとも玖珂郡の例に関してはまず岩国産物の記載との関連を重視して、カワクモが岩国周辺で二百年余りの歴史を有するかも知れないことを考慮する必要がある。長門名寄にも「水黽（シオウリ）　アメ　川クモ」と載っているから、その範囲はさらに広かったようだ。

⑥ 79図「旋花（ひるがお）」〈図F〉地図ではヒルガオA、ノアサガオF、チョーセン アサガオMなどが点在している中で、玖珂郡に1地点ずつチョコバナ ∩ とヨナズル ◆ が見える。

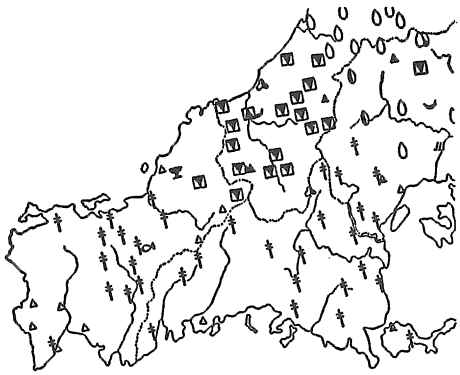
産物資料の記載は興味深い。ヒルガオが地図に一致するのはよいとして、岩国産物に異名として載るカッコウは、地図の広島県、岡山県および島根県中央部に分布しているカッポー、カッコー類と関係があると思われ、かつては周防でも使用されていたことを示している。また、徳山産物が載せているチョコバナは、玖珂郡と長門北部に残るものの、本格的な分布は石見西部である。瀬戸内沿岸から北へ分布領域が変わったのである。なお長門名寄には「チョコハナ」も「ノアサカホ」も載っており、後者はむしろ新しく周防へ進出したものか。

⑦ 89図「露草」〈図G〉地図で周防全域は ハナガラ ✝ の分布で占められている。従って、産物資料のハナガラは地図と一致しているから問題にはならない。所が、異名のカメガラ、カマツカについては、前条と同じように分布の変遷があった事を教えるものである。

カメガラ ▼ は周防には見えないが、長門に2地点あるほか、島根県の石見西部にまとまって分布している。前のチョコバナと同じように、かつて周防にあった領域が北へ移ったものらしい。長門名寄にカメガラは載っていない。カマツカ 0 については、岩国産物



図F

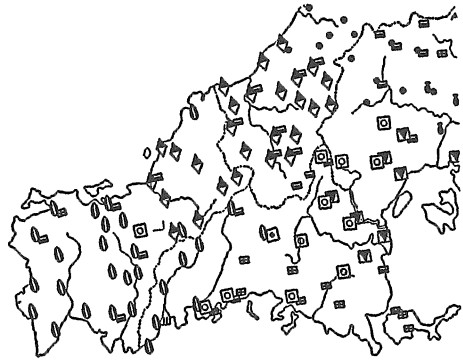


図G

などに記載がないから、周防西部から寄せられた地元資料に載っていたものと思われる。これも地図によるとカメガラとハナガラの分布域より東の中国地方一帯に広がっているカマツカ、カマズカ類の名残りのようである。ハナガラが駆逐したのであろうか。

⑧ **103図「そら豆」**〈図H〉地図で長門境界付近のトーマメ ◐ を除くと全域にエンドー ▽ 、オーエンドー ◫ が分布し、一部はソラズ ⊞ と重なっている。今日の呼称から見ると、ソラマメをエンドーというのは異様であるが、広島県へも続いているし、島根県東部の出雲地方に2地点見えているから、古くはかなり有力な名称であったらしい。

岩国産物が載せるオオエンドウは、まさしく地図の語形が時代を遡るものである事を明らかにしている。徳山産物が見出しにするテンジクマメ ◆ は、なぜか周防名寄の採る所とならなかったようだが、長門の西北部とこれに続く島根県石見西部に広く用いられている語である。つまり、エンドー、オオエンドーが周防の標準的な名称として残る代わりに、テンジクマメが北へ追いやられた恰好となっている。ちなみに、長門名寄では「蠶豆（ソラマメ）　大小　トウマメ　天竺マメ氏」となっている。地図に現れている所と同じだから、周防におけるテンジクマメの衰退がいっそう際立つ事になる。



図H

⑨ **110図「南瓜」**〈図I〉

本条を取り上げるのは、前条までとは違った観点からである。

地図から分かるように、どの地点をとっても複数の記号が重複して、これから分布を描き出すのはなかなか困難なありさまである。ただ、多くの地点でカボチャ ● とナンキン ▲ 、ボーブラ類 ⊖ ○ ⊕ が併用されていることはすぐに分かる。これほどの語形の重複（併用）が実際にあるとは容易に信じ難いことである。地図に見える異な

った語形は、その意味する内容が異なる事を表しているのではないか。

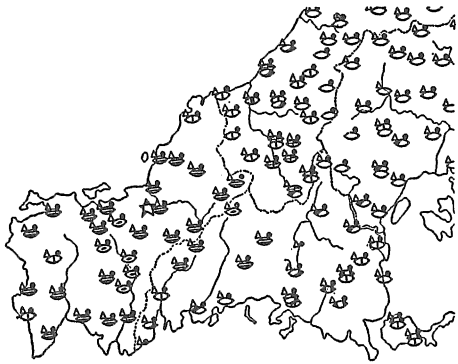
解説がいうように、少し前の南瓜には形の上で今日普通に見られる菊座形や丸形の他に、筒型とも瓢箪型ともいえる数種類があった。例えば『日本言語地図』180図の質問文では三種類の図を示しながら総称を質問しているから、この違いは十分意識されていた訳である。にもかかわらず、地図には種類の違いによる分布への影響が明瞭には描かれていない。1地点での併用を『中国五県言語地図』ほど詳しく示さないこともあって、その解説で「全国的に見て分布がそれほど複雑でなく、それぞれの語類が比較的まとまった領域をもっており」という通りになっている。だとすると、地図が示している併用をどのように理解すればよいのか。

産物資料ではどうかというと、岩国産物は「南瓜（ハウブラ）　其種　南京　朝鮮」と記載し、「南瓜」と「南京」は明らかに種類の異なる名称として区別され、周防名寄もこれを受け継いでいる。江戸からの要請（注12）でこの区別に関する注記が作られていて、次のように説明されている。

南瓜ノ種　朝鮮　南京

色淡紅ニシテ円キヲ朝鮮ト呼、色蒼ク形瓢箪ノ如ヲ南京ト呼フ

従って周防においては赤色または黄色に熟する円形（丸形）のものがチョウセン、緑色の瓢箪形のものがナンキンと使い分けられ、総称または代表種としてボウブラがあったことになる。（注13）ここで思い至るのは、『日本言語地図』で香川県と愛媛県南部に分布しているチョーセンという語形である。「南瓜」について詳しい文献例を引く論攷はいくつもあるが、この語形の来歴に言及された事はないようである。（注14）京阪や江戸にはこの種の南瓜が普及しなかったために文献に現れる事がなかったのかも知れず（江戸から注記の要請があった事はその可能性を示している）、やはり種類ごとの



図I

栽培の歴史を抜きにして直ちに総称を問題にするのは、少なくとも西日本では適当でないと思う。各地の産物資料の記載を積み重ねて行けば、これらの事情をさらに明確にできるかも知れない。(注15)

以上の外にも、33図「蛞蝓」におけるナメクジリ、41図「穀象虫」におけるコメムシなどを、①～⑧の類例として加える事ができる。多くの対照表からわずか9条に言及しただけだが、これだけでも産物資料の方言語彙資料としての有効性をうかがう事ができると思う。とりわけ、③のツチバチや⑥のチョコバナ、⑦のカメガラ、⑧のテンジクマメに関しては、産物資料に載っている項目が言語地図では長門や島根県石見地域に分布するという共通した特徴を指摘する事ができた。周防から分布領域が移ったのか、あるいは、かつての広く一様な分布から周防だけが新しい語形へ転じてしまったのか、これだけの証拠からは何ともいえないが、ともかく周防地域の過去の分布状況を産物資料が反映している可能性は認められるのではないだろうか。そうだとすれば、他の文献に現れる事がなく、ただ産物資料だけに載っている多くの項目もまた、過去の確実な記録として重視しなければならない。

注

1 「『周防産物名寄』の成立」島大国文、第二十号。
2 「『出雲国産物名疏』の絵図と異名と」島大国文、第十七号。
3 沖村義人『樹木の島根方言』。
4 『集成』第Ⅸ巻所収の「岩国御領産物御附出と江戸御付出字違之分書抜」は、岩国産物と周防国産物帳として江戸へ送られた報告との表記の相違を綿密に書き抜いた資料で、対照された記事の一方は完成本の記載の通りと考えられる。また、同資料はしばしば「初手」の「江戸御付出」として中間報告の記事を引用する事があり、周防名寄と比較する事が可能である。なお注1の論文でも触れている。
5 注4の資料で、岩国産物の引用記事と完成本のそれとの間にあって、どこを改めたのか詳しく書き留めた記事である。
6 周防名寄の魚類について、担当者の学統の違いが記述の相違に反映した可能性は島田勇雄氏が指摘された所である。「近世本草書における和名と方言(二)―イシモチとニベ―」近代、四十一号。「長防産物名寄における魚類」近世文芸史稿、十三号。
7 同じような見通しは、隠岐方言を例として簡単に述べた事がある。「『隠岐国産物帳』の諸本について」島根大学法文学部紀要

文学科編、第十一号。

8　単に周防地域における確認だけでなく、地元資料との対照による狭い範囲での確認が可能になれば、資料としての有効性はさらに高まるはずである。しかし、豊富な項目を有する岩国産物はともかく、他二資料は量的にやや貧弱な所があるから、本稿ではこれ以上の追究は行わない。

9　『集成』Ⅷ巻所収「周防長門産物　丹羽正伯え不被差出御内見之覚」1038頁。

10　注4の資料による。

11　この辺りの議論になると、元文三年書写本の作者は誰なのか、烏田智庵かそれとも他人かという未解決の問題が関わってくる。筆者は今の所他人の書写と考えている。

12　『集成』Ⅷ巻所収「周防国産物之内絵形」454頁。

13　「南瓜」の種類ごとの特徴を記した文献の一つである小野蘭山の『本草綱目啓蒙』には四種を挙げ、うち三種に次の解説がある。

南瓜　ボウブラ

京師ニテハ誤テカボチヤト呼ブ。瓜形円扁ニシテ竪ニヒダアリ。初ハ深緑色、熟スレバ黄赤色。（中略）一種形長ククビアリテ壷ノ形ノ如シテ深緑色、又熟シテ黄色ニナル者アリ。是ヲトウナスビト云。一名カボチヤ、カボチヤボウブラ、ナンキンボウフラ（中略）又一種アコダウリハ、形小ニシテ六寸許、正円ニシテヒダナク皮色赤シ。或紅ノ字アレハ紅南瓜ト名クベシ。（巻二十四、菜部）

注記でいう所の「南京」はトウナスビに、「朝鮮」はアコダウリに該当するように思われるが、まだ検討の余地がある。

14　『日本言語地図解説』4、佐藤亮一「物の伝来と名称の由来―渡来作物名をめぐって―」言語生活321号、沢木幹栄「物とことば」中公新書『日本の方言地図』、小林隆「かぼちゃ」『講座日本語の語彙9　語誌Ⅰ』、広戸惇『方言語彙の研究』などを参照した。ついでにいえば、佐藤氏がナンバン、チョウセン、サツマを挙げて、「これらは、ナンバン～・チョウセン～・サツマ～の下略形であって、ナンキンやトオナスなどと同様に、命名当初は品種の違いや、形状の類似する他の作物との区別を表わしていたものであろう。」と指摘されている。産物資料の記載によってこの推定も支持される訳である。

15　参考までに中国地方の産物帳から「南瓜」の例を引くと、岡山藩の『備前国備中国之内領内産物帳』の「本帳」には、「南瓜（ボウブラ）　さつまゆふがほとも」と『物類称呼』と同じ異名を載せ、『出雲国産物名疏』では、かつて述べた事があるように「カホチヤ」と「南瓜」および「アコタウリ」が挙がっている。「方言資料としての『出雲国産物名疏』」（『奥村三雄教授退官記念　国語学論集』所収）参照。

付表 『中国五県言語地図』と産物資料 項目対照表

語＼地	岩国地域	岩国産物帳	玖珂熊毛郡	玖珂熊毛郡	徳山地域	徳山産物帳	周防産物帳
背黒鶺鴒 Fig. 1 黄鶺鴒 Fig. 2	カワラスズメ カーカスズメ セキレー	カワラスズメ ＊カワスズメ セキレイ ＊イシタタキ	カワラスズメ カーラスズメ カワスズメ セキセー	カワラスズメ セキレイ	カワラスズメ カーラスズメ セキレー	カワラスズメ	カワラスズメ ＊カワスズメ セキレイ ＊イシタタキ
川蟬 Fig. 3	ショニ	ショニ ＊スドリ ＊カワセミ	ショニ カワセミ	ショニ ＊スドリ ＊カワセミ	ショニ		ショニ ＊スドリ ＊カワセミ
頬白 Fig. 4	ショートー ホージロ	シトト ＊ショウトウ ＊フジジュウ	ホージロ ショートー	ホオジロ	ホージロ	ホオジロ	ホオジロ シトト ＊ショウトウ ＊フジジュウ
四十雀 Fig. 5	シジューガラ ホージロ	シジュウガラ	シジューガラ ホージロ		シジューガラ アオシュー		シジュウガラ
えなが Fig. 6	マツムシ マツスズメ	マツムシ ＊マツガラ ＊マツスズメ ＊マツムシリ	マツムシ マツスズメ		マツムシ マツガラ		マツムシ ＊マツガラ ＊マツスズメ ＊マツムシリ
鶺鴒 Fig. 7	センネン ミソクリセンネン	ミソサンザイ ＊センネン	センネン ミソサザイ	ミソサンザイ	センネン		ミソサンザイ ＊センネン
ひたき Fig. 8	ヒンコチ	ヒタキ	ヒンコチ モンツキ	ヒタキ	ヒンコチ バカチョー	ヒタキ	ヒタキ ＊コウタキ
燕 Fig. 9	ツバクロ	ツバメ	ツバクロ	ツバメ	ツバクロ トーツバクロ ミヤマツバクロ		ツバメ ツチツバメ
梟 Fig. 10	フルツク フクロー	フクロウ	フルツク フクロー	フクコウ	フルツク フクロー コーキチドリ		フクロウ
啄木 Fig. 12	キツツキ	テラツツキ ＊マツクイドリ	キツツキ	キツツキ	オーゲラ キツツキ		テラツツキ ＊マツクイドリ ＊キツツキ ＊ケラツツキ
目高 Fig. 15	ネンブゴ類 タンコ	メダカ ＊タイオ ＊タイコボウ ＊ネンブツゴ	ケンバイゴ メータンゴ ハエノコ メダカ メメタンゴ	メダカ	ハエノコ類 ケンバイゴ類 ネンバ類 メンバイゴ類		メダカ ＊メイタ ＊タイオ ＊タコボウ ＊ネンブツゴ
蟾 Fig. 18	ガボー	ゴウナ	ニナ ニーナ ゴーニナ ニラ	ニナ	ニナ	ニナ	ニナ ＊ゴウナ

語＼地	岩国地域	岩国産物帳	玖珂熊毛郡	玖珂熊毛郡	徳山地域	徳山産物帳	周防産物帳
蟻地獄 Fig. 22	コモコモ コモコモー	コモコモ ＊グルモウジ	グルモージ クルグルモージ コモコモ		グルモージ グルモンジ		グルモウジ
蟋蟀 Fig. 24	クロツチ キーキー	クロツズ キリギリス ＊ギイス	クロツズ クロツツ コーロギ	キリギリス	クロツズ	クロツズ	クロツズ ＊キリギリス
女郎蜘蛛 Fig. 26	ジョーログモ ジョーリグモ ダイジョーグモ ヘータイグモ	ジョウロウグモ ＊ダンジリ	ジョーログモ ダイジョーグモ ダイジョグモ	ジョログモ	ジョログモ	ジョロウグモ	ジョウロウグモ ＊マダラ ＊ダンジリ
蝗 Fig. 29	イナゴ ギナンゴー ギース	イナゴ ＊キリンドウ	キナンドー ギナンドー ギース	キナンドウ	キナンドー キナンド	フシュウ ＊イナゴ	イナゴ ＊ギナンドウ ＊キリンドウ
赤蜻蛉 Fig. 30	ショーリョトンボ ショーロートンボ	ショウリョウトンボウ ＊アカトンボウ	ショーリョトンボ ショーロトンボ	ショウリョウトンボウ アカトンボウ	ショーリョトンボ アカトンボ		アカトンボウ ＊ヤクシトンボウ ショウリョウトンボウ ＊アカトンボウ
蝸牛 Fig. 32	デンデンムシ ゼンゼンムシ カタツムリ	カタツブリ ＊デデムシ	デンデンムシ カタツムリ マイマイツブラ	カタツブリ	デンデンムシ カタツムリ	カタツブリ	カタツブリ ＊デデムシ ＊マイマイツブリ ＊グルモウジ
蛞蝓 Fig. 33	ナメクジ ナメックジ ナメタ ナメツクリ ナマツクリ ナマズ	ナメクジリ	ナメクジ ナマックジ ナメタレ オヒメサマ オヒメサー		ナメクジ	ナメクジリ	ナメクジリ
蟷螂 Fig. 36	カマキリ カマツクリ	カマキリ ＊カマツクリ	カマキリ カマツクリ	カマキリ	カマキリ	カマキリ	カマキリ ＊カマツクリ
黄金虫 Fig. 38	ガンガラ カナブン カナカナブイ	ブイブイ カナブイブイ	アブラムシ カネウジ カナブン カナブンブン ブンブン カナブイブイ キンキンムシ	アブラムシ？	カナブンブン ブイブイ	コガネムシ	コガネムシ ＊マツノハクイムシ ＊カナブイブイ ＊ヒトリムシ
紙魚 Fig. 39	シミ	シミ	シミ	シミ	ツミ シミ		シミ
蠊姑 Fig. 40	ケラ	ケラ ＊タスキ	ケラ	ケラ	ケラ	ケラ	ケラ ＊タスキ
穀象虫 Fig. 41	ツミ	コメムシ	ツミ		ツミ		コメムシ ＊ツミ

付表 『中国五県言語地図』と産物資料 項目対照表

語＼地	岩国地域	岩国産物帳	玖珂熊毛郡	玖珂熊毛帳	徳山地域	徳山産物帳	周防産物帳
土蜂 Fig. 42	ドロバチ イガバチ	ジガバチ タブミ	ジガバチ ドロバチ	ジガバチ ツチバチ	ドロバチ ツチバチ	ジガバチ	ジガバチ ＊コシボソ ツチバチ ＊アナバチ ＊アゼナブリ ＊アゼスイ タブミ
熊蜂 Fig. 43	クバンバチ スズメバチ	シシバチ クマバチ	クマンバチ クワンバチ クバンバチ シシバチ シシクバン	クマバチ	クマンバチ シシバチ エンドーバチ ダンゴバチ	クマバチ	クマバチ シシバチ
大きい蚋 Fig. 44	ブト	ブト	ブト	ブト	ブト	ブト	ブト
毛虫 Fig. 47	オコゼ ヒゲムシ ケムシ	ケムシ ＊ヒゲムシ ＊オコゼ	ケムシ オコゼ オコデ ヒデンウジ	ケムシ	ヒゲウジ オコデ ケムシ		ケムシ ＊ヒゲムシ ＊オコゼ
蟻 Fig. 50	アリコ	アリ アリコ？ ＊アマコ？	アリコ	アリ	アリコ	アリ	アリ アリゴ？ ＊ママゴ？
蝶 Fig. 51	チョーチョ チョー	チョウ	チョーチョ	チョウ	チョーチョ	チョウ	チョウ
だに Fig. 52	ダニ	ヤエ フツビ	ヤエ イエダニ ダニ	ヤエ	ヤエ		フツミ ＊フツビ ＊ヤエ(小)
水澄まし Fig. 53	ミズスマシ ゲンゴロー	ゴキアライ ＊イロハムシ	シロカキムシ マイマイコ ミズスマシ	マイマイムシ	シロカキムシ ミズスマシ		マイマイムシ ＊サオトメムシ ＊チャヒキムシ ＊イロハムシ ＊ゴキアライ
あめんぼ Fig. 54	アメンボ(ー) スイジンサン	アメ ＊カワクモ ＊アメンドウ エブリサシ ＊オンボウムシ	アメンボ(ー) ミズスマシ	エブリサシ	ウマムシ		アメ ＊シオウリ ＊カワグモ ＊アメンドウ ＊シオカラ エブリサシ ＊オンボウムシ
田亀 Fig. 55	ヤゴ	タガメ	オンボー オンボ オンボーサー ナエゴノオヤ		ナイノコノオヤ		タガメ
蝦蟇 Fig. 56	ワンビキ ワンヒョー ドンビキ	ワンビキ	ワンビキ ドンビキ	ヒキ	ドンビキ ワンビキ	ヒキガエル？	ヒキ ＊ワンビキ

語＼地	岩国地域	岩国産物帳	玖珂熊毛郡	玖珂熊毛帳	徳山地域	徳山産物帳	周防産物帳
殿様蛙 Fig. 57	ヒキ トノサマガエル	ヒキ？	アオビキ アカビキ トノサマガエル	カエル？ ヒキ？	トノサマガエル	アオガエル？	アオヒキ？
もぐら Fig. 59	ウグロ	ウグロモチ	ウグロ ウグラ ウグラモチ モグラ	ウグロモチ	モグラ ウグラ ウグロ モグロ	ウグロモチ	ウグロモチ
蜥蜴 Fig. 61	トカケ	トカケ	トカケ	トカケ	トカケ	トカケ	トカゲ ＊トカキリ
いもり Fig. 62	イモリ	イモリ	イモリ イモーラー		イモリ	イモリ	イモリ
やもり Fig. 63	ヤモリ	ヤモリ シチブジャ	ヤモリ	ヤモリ	ヒチブ		ヤモリ シチブジャ
青大将 Fig. 64	ネズミトリ アオダイショー ヘビ	クチナワ オオダタモウリ ネズミトリ アオクチナワ ケタモチ ＊サツマ	ネズミトリ ダタモリ ダタ		ダタ ヤマシ アオダイショー	クチナワ	ネズミトリ オオダタモウリ ケタモチ ＊サツマ
蝮 Fig. 67	ハミ マムシ	マムシ ＊ハミ	ハミ マムシ	マムシ ＊ハミ	ハミ	ハミ ＊クチバミ	マムシ ＊ハミ
木通 Fig. 73	アケビ アキビ	アケビ ＊アキンドカズラ	アケビ アキビ	アケビ	アケビ		アケビ ＊アキンドカズラ
馬酔木 Fig. 74	ゴマイリ	アセボノキ ＊ゴマイリ サルヌメリ ＊ウバノテヤキ	ゴマイリシバ ゴマイリ ウマゴロシ	ウバノテヤキ ＊ゴマイリ ＊アセボノキ	バンチャゲノキ チャンチャケシバ センジシバ		ウバノテヤキ ＊アセボノキ ＊ゴマイリ
春菜萸 Fig. 75	ゲメイ	ナワシログミ	ハルゲイメ ナワシログイメ ゲイメ		ナワシログイメ ナワシログイミ ゲイメ ゲイミ		ナワシログミ
秋菜萸 Fig. 76	ゲイメ	アキグミ ＊ゲイメ ＊ヤマグミ	アキゲイメ ゲイメ	アキグミ ＊ゲイメ	ゲイメ ゲイミ		アキグミ ＊ゲイメ ＊ヤマグミ
虎 F.77	ハイタナ	イタドリ	イタドリ	イタドリ	イタドリ		イタドリ
昼顔 Fig. 79	ヒルガオ アサガオ	ヒルガオ ＊カッコウ	チョーセンアサガオ ヒルガオ	ヒルガオ	ノアサガオ チョーセンアサガオ	ヒルガオ ＊チョコバナ	ヒルガオ ＊カッコウ ＊チョコバナ

語＼地	岩国地域	岩国産物帳	玖珂熊毛郡	玖珂熊毛帳	徳山地域	徳山産物帳	周防産物帳
曼珠沙華 Fig. 80	ヒガンバナ イットキバナ ドクバナ	マンジュシャゲ ＊イットキバナ ＊ウシモメラ ＊オオモメラ ＊ボデ ＊シシグサ ナツズイセン	ヒガンバナ ドクバナ イットキバナ モネラ テクサレバナ	センザイゴウラ ＊マエギシャ ＊オニモメラ ＊イットキグサ	モメラ ヒガンバナ	モメラ	マンジュシャゲ ＊イットキグサ ＊オオモメラ ＊ボデ ＊シシグサ ウシモメラ ＊シビトバナ ＊ナツズイセン ＊センザイゴウロ ＊ニュウドウモメラ ＊マエギシャ ＊オニモメラ
山百合 Fig. 81	ヤマユリ オリユリ	ゴウロ ＊センセンゴウロ ヤマゴウウ ＊シャクジョウユリ ＊ゴウラ ササゴウラ ＊ハタケユリ	ゴーラ ヤマユリ ノユリ	ユリ カッコウ	ゴーラ ユリ	ヒメユリ	ユリ ＊ゴウラ ＊ササユリ カッコウ ヒメユリ ゴウロ ＊ゼンゼンゴウロ ＊ウグイス
山葡萄 Fig. 82	オンボーマメ ヤマブドー	エビカズラ	ヤマブドー ノブドー		ヤマブドー ノブドー		エビカズラ
合歓木 Fig. 83	コーカイ ネブリノキ	ネブリノキ	ネブノキ ネブリノキ コーカイ	ネブリノキ	ネブノキ コーカイ	ネブリノキ ＊コウカイ	ネブリノキ ＊コウカイ
酢漿 Fig. 84	カンカングサ	カタバミ ＊カガミグサ	スイスイ スイバ ミツバ	カガミグサ ＊カタバミ	カタバミ		カタバミ ＊カガミグサ
酸葉 F.85	スイスイバ	スイバ	スイバ類	スイバ	スイバ類	スイバ	スイバ
龍のひげ Fig. 86	オクメノメンタマ ジーノメータマ ジートバーノメータマ	ジョウガヒゲ ＊リュウガヒゲ	ジュード ジーナメ リューゴ リューゴダマ	リュウノヒゲ	ジュード ジューダンボ ジュージューダマ	バクモン ＊リュウノヒゲ	リュウノヒゲ ＊ジョウガヒゲ ＊イワスゲ ＊カゲロウグサ
サルトリイバラ Fig. 88	カシワイギ サンキライ イギ	カワライバラ ＊サルトリグイ	カシワイギ イギ	サルトリイギ	カシワイギ イギ	サルトリイバラ ＊サルトリイギ	サルトリイギ ＊サルトリグイ ＊カワライバラ
露草 Fig. 89	ハナガラ	ツユクサ ＊ハナガラ ＊カマツカ	ハナガラ	ハナガラ	ハナガラ	カメガラ ＊ハナガラ	ハナガラ ＊ツユクサ ＊カマツカ ＊カメガラ
蓮華 Fig. 91	レンゲ ゲンゲ	ゲンゲ	ゲンゲ レンゲ	レンゲバナ	ゲンゲ レンゲ	レンゲバナ ＊ホトケノザ	レンゲバナ ゲンゲ

語＼地	岩国地域	岩国産物帳	玖珂熊毛郡	玖珂熊毛帳	徳山地域	徳山産物帳	周防産物帳
菫 Fig. 92	スモートリグサ	スミレ スモウトリグサ	スモートリグサ スモートリバナ スミレ	スミレ	ジーバー スモートリグサ	スモウトリグサ	スミレ ＊スモウトリ ＊ドウドウウマグサ
杉菜 Fig. 95	スギナ	スギナ ＊トウナ	スギナ	スギナ	スギナ	スギナ	ウギナ ＊トウナ
土筆 Fig. 96	ツクツクボーシ ホーシ ツクシ	ツクツクシ ＊ホウシ	ヒガンボーズ ヒガンボーサー ホーシ ツクシ	ツクシ ＊ツクツクシ	ヒガンボーズ	ツクヅクシ ＊ツクシ	ツクシ ＊ヒガンボウズ ホウシ
春蘭 Fig. 97	ハコリ ジーババー ホコリボトケ	ハイコリ ＊ハクリ	ハコリ ハコロボーズ ハコロボーサー ジーバー	ホウクリ	ホークリ		ホウクリ ＊ハイコリ ＊ハクリ
木賊 Fig. 98	トグサ ハスリ	トクサ	トグサ ハスリ	トクサ	トグサ ハスリ		トクサ
はこべ Fig. 99	ヒズリ	ハコベ ＊ヒズリ	ヒズリ	ヒズリ ＊ハコベ	ヒズリ	ハコベ ＊ヒズリ	ヒズリ ＊ハコベ
母子草 Fig. 100		ホウコグサ	トノサマヨモギ モチグサ		トノサマヨモギ	モチグサ ホウコグサ	ホウコグサ ＊ノゴウシ ＊モチグサ ＊トノサマグサ
どくだみ Fig. 101	ジョーロクサ ドクダミ	ドクダミ ＊ケイセイグサ ＊ノバイタナ ＊カキダノシ	ジョーロクサ ジョーログサ ニュードグサ センチングサ ドクダミ		ニュードグサ		ゴゼナ ＊ドクダミ ＊ケイセイグサ ＊ノバイタナ ＊カキダノシ
蚕豆(ソラマメ) Fig. 103	エンドー ソラマメ	ソラマメ ＊オオエンドウ	ソラズ オーエンドー		トーマメ キノクリエンドー オーエンドー	デンジクマメ ＊ソラマメ	ソラマメ ＊オオエンドウ
玉蜀黍 Fig. 104	ナンマンキビ ナンマン	ナンバンキビ	ナンマン ナンマンキビ トーキビ		ナンマン	ナンバンキビ	ナンバンキビ
南瓜 Fig. 110	ナンキン カボチャ ボーブラ ボーフラ	ボウブラ ナンキン チョウセン	ナンキン カボチャ ボーラ トーブラ ボータ ボブラ	ボウブラ ナンキン	カボチャ ナンキン ボーボラ	ボウブラ	ボウブラ ナンキン チョウセン